



本日はよくお参り下さいました

三寒四温を繰り返して春になるといいですが、まだまだ春には程遠い気がします。二月中はインフルエンザが猛威をふるい大変でした。やっと落ち着きを取り戻したかという二月の終わりに、天皇陛下がインフルエンザにご罹患というニュースが流れました。一日も早いご回復をお祈り申し上げます。さて、先日県立高校の入試合格発表があり、お礼参りや願ほどきに沢山の方々が境内を訪れています。合格された方はおめでとうございます。残念ながら叶わなかった方も、毎晩夜遅くまで勉強されていたと思います。合否の境目はた



った一点だったかもしれません。心からご健闘を称え、今後の活躍をお祈り致します。そして3月は卒業・進級の月でもあります。一生懸命過ごした学校生活、幼稚園、保育園、それぞれの

人生の節目に起こる感情は、喜びでしょうか、感動でしょうか、はたまた悲しみでしょうか。スマホやタブレットなどの普及によって暇を持て余すことは少なくなりましたが、裏を返せば時間を吸いとられているような気もします。人と向き合う時間も、自分と向き合う時間も、両方大切です。なるべくなら機械よりは人と向き合っていたいと思う今日この頃です。今月も皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。権禰宜道子

3月

1日・15日 月次祭(つきなみさい)皇室の永遠と国家の発展、氏子・崇敬者並びに社会の幸福と平和を祈ります。

3日 ひな祭 女子の健やかな成長を願う祭り。

5日 啓蟄(けいちつ)春を知らせ、虫たちを目覚めさせる春雷(しゅんらい)が大きくなりやすい時期



11日 東日本大震災 黙祷を捧げましょう

17日 彼岸入り 17日～23日までの彼岸初日。

20日 春分の日(彼岸中日)自然をたたえ生物を慈しむ。

春季皇霊祭(しゅんきこうれいさい)毎年春分の日(20日)に宮中の皇霊殿で行われる皇室の大祭で天皇陛下御自ら歴代の天皇皇后御皇族など皇祖の神霊をまつる儀式。またこの日、皇霊殿前庭では、宮内庁職員により東遊(あずまあそび)の儀が執り行われます(非公開)。

春季神殿祭(しゅんきしんでんさい) 皇霊祭と同じく皇室の大祭で、宮中の神殿で行われる神恩感謝の祭典です。

23日 彼岸明け 17～23日までの彼岸最終日。

東遊(あずまあそび)とは? 古く東国地方で風俗歌に合わせて行われた民俗舞踊。平安時代から宮廷・貴族・神社の間で神事舞の一つとして演じられた。歌方(うたいたかた)は笈拍子(しやくびょうし)を持ち、笛・箏(ひちりき)・和琴(わごん)の伴奏で歌い、四人または六人の舞人が近衛(このえ)の武官の正装などをして舞う。現在は宮中や神社の祭礼で行われる。東舞(あずままい)。

天神さまの豆知識

―お彼岸の意味―

●日本人とお彼岸 春と秋にはお彼岸

があります。お彼岸にはお墓参りをします。お彼岸という言葉自体が仏教用語というところもあり、仏教のイメージが強いようです。しかし神道でもお彼岸は大切な期間です。

●葬儀の自由はなかった? 時代背景を江戸時代までさかのぼると、当時は寺

請け制度によって全ての日本人が仏葬で行わなければなりません。神職も例外ではなく、神職の葬儀を僧侶が行う時代が長く続きました。仏教が伝来してから葬儀は主として仏葬が行われていきましたが、他の葬儀の形もありました。

●哀惜の念を形に



昔は「自葬」といって、葬儀を哀惜の念に包まれながら、残された家族自らが行う場合がありました。この「自葬」が明治五年に廃止されたことにより、遺族の依頼を受けた神職が遺族に代わって神葬祭を奉仕する形が定着します。

●春と秋のみたま祭り 時代背景につ

いて触れましたが、日本では古来から春と秋にはみたま祭りを行ってきました。宮中では春分には春季皇霊祭(しゅんらいさい)、秋分には秋季皇霊祭(しゅんらいさい)という神道式の祖霊祭祀が行われます。春分の日(秋分の日)は国民の祝日ですが、みたま祭りの日と思えばわかりやすいですね。

参考・『神葬祭の葉』神奈川県神社庁発行

お祭り歳時記

ほてまつり

帆手祭(三月十日)



陸奥に春を告げる、火伏(ひぶせ)のお祭り

陸奥の国の一宮、宮城県塩釜市塩竈(しおがま)神社のお祭りです。重さ二五〇貫(約一トン)の神輿を若者十六人が担ぎ、鹽竈(しおがま)神社の参道・表坂を一気に下り、さらに市内を勢いよく御神幸する勇壮な祭りです。約三百年前、火伏祭として町内の厄除けと繁栄を祈願して始まり、神輿洗いの神事とも呼ばれ、港町塩竈で行われることになりました。帆手祭と呼ぶようになりました。

今月の言葉

みあらか

『心はすなわち神明の舎、形は天地と同根たり』

(吉田兼俱・神道大意)

人間は神明のタマシイの分魂を受けて、この世に出生したものである。人間の最も尊いのは、自分の魂(心)であることを考えると、人間の魂(心)こそは、神明(かみ)の魂の寄っているところである。又人間の形にしても、天地の生氣を受け、その原素は、天地の原素と同じであることを考えると、天地と同じ根につながり、天地と同体といえる。人間の心も身体も天地と離れて存在し得ない以上、神も天地も人間も同体だといえる。参考文献『神道百言』岡田米夫著 一般財団法人神道文化会発行